Title	相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響について
Sub Title	Effect of relative income transition on generalized trust
Author	上村, 一樹(Kamimura, Kazuki) 駒村, 康平(Komamura, Kohei)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2014
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.106, No.4 (2014. 1) ,p.495(79)- 515(99)
JaLC DOI	10.14991/001.20140101-0079
Abstract	<p>本稿では, 一時点における相対所得の水準ではなく, 相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響について, 実証分析を行った。男性の場合, 相対所得の上昇が一般的信頼度に影響を与えていた。一方, 女性の場合も相対所得の上下が一般的信頼度を変化させていたが, その影響は男性の場合より小さかった。また, 相対所得が大きく上昇するほど一般的信頼度が高まるわけではなく, 両者の関係はより複雑なものであることが明らかになった。</p> <p>This study performs an empirical analysis on the effect of relative income transition on generalized trust, instead of a relative income standard at a certain point in time.</p> <p>For males, increases in relative income influenced generalized trust.</p> <p>On the other hand, although increases or decreases in relative income have affected changes in generalized trust for females as well, this impact was smaller for females when compared to that for males.</p> <p>In addition, a greater increase in relative incomes does not imply an improvement in generalized trust, indicating that the relationship between the two is more complex than expected.</p>
Notes	小特集: 格差・貧困政策に関する総合的研究 挿表
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20140101-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響について

Effect of Relative Income Transition on Generalized Trust

上村 一樹(Kazuki Kamimura)

駒村 康平(Kohei Komamura)

本稿では、一時点における相対所得の水準ではなく、相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響について、実証分析を行った。男性の場合、相対所得の上昇が一般的信頼度に影響を与えていた。一方、女性の場合も相対所得の上下が一般的信頼度を変化させていたが、その影響は男性の場合より小さかった。また、相対所得が大きく上昇するほど一般的信頼度が高まるわけではなく、両者の関係はより複雑なものであることが明らかになった。

Abstract

This study performs an empirical analysis on the effect of relative income transition on generalized trust, instead of a relative income standard at a certain point in time. For males, increases in relative income influenced generalized trust. On the other hand, although increases or decreases in relative income have affected changes in generalized trust for females as well, this impact was smaller for females when compared to that for males. In addition, a greater increase in relative incomes does not imply an improvement in generalized trust, indicating that the relationship between the two is more complex than expected.

相対所得の変化が 一般的信頼度に与える影響について⁽¹⁾

上 村 一 樹
駒 村 康 平

要 旨

本稿では、一時点における相対所得の水準ではなく、相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響について、実証分析を行った。男性の場合、相対所得の上昇が一般的信頼度に影響を与えていた。一方、女性の場合も相対所得の上下が一般的信頼度を変化させていたが、その影響は男性の場合より小さかった。また、相対所得が大きく上昇するほど一般的信頼度が高まるわけではなく、両者の関係はより複雑なものであることが明らかになった。

キーワード

一般的信頼度、信頼、相対所得、離散選択

1. はじめに

他者に対する信頼とは、経済活動の根幹といってもよいほどの重要な概念である。信頼がなければあらゆる取引は成立せず、貨幣という制度も機能しない。

信頼は、倫理、道徳、ノルムと密接に関連している。Arrow (1970) は、市場の失敗を回避、補償するという点から、社会相互の関係における倫理、道徳を含んだノルムの重要性について強調した上で、信頼の役割について以下のように説明している。

I suggest as one possible interpretation that they are reactions of society to compensate for market failures. It is useful for individuals to have some trust in each other's word.

In the absence of trust, it would become very costly to arrange for alternative sanctions and guarantees, and many opportunities for mutually beneficial cooperation would have to be foregone.

(1) Japan General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。

（「個々人がお互いの言葉をかなり信用するのは有益である。信頼がなければ、その代わりに必要になる制裁や保証のために、多大な費用を必要とし、また互いにとって有益な協調の多くの機会を失わせることになるであろう。」）

信頼は取引費用を引き下げ、市場の効率性を高め、人々の協力関係を強める。そのため、信頼度の高さが経済成長の源泉であるという観点からの研究は数多く、Beugelsdijk et al. (2004) など、数多くの論文において、信頼度が高いことが経済成長に好影響を与えることが確認されている。

信頼度の重要性は経済成長に与える影響にとどまらない。社会に対する信頼度は、所得再分配に対する態度にも影響を与えることが確認されている。⁽²⁾

個人の主観的厚生もまた、信頼度により影響されることが知られてきている。たとえば、Kuroki (2011) の研究では、Japan General Social Survey (JGSS) を用いて、個人レベルの信頼度や地域の信頼度が個人の主観的厚生に与える影響が分析されている。その結果、信頼度が高まると幸福度も高まることを確認している。

信頼度の重要性が経済成長の源泉であり、個人の主観的厚生までも高めることが理解されるとともに、そもそも信頼度がどのように醸成されるかに関する研究も盛んになってきた。信頼度に関連した実証分析では、一般的信頼度と呼ばれる指標が分析対象となっていることが多い。一般的信頼度とは、「一般的に、人は信用できると思いますか。」といった簡潔な質問文に対して、「はい」「いいえ」「場合による」などの選択肢から回答させることによって定義される。

一般的信頼度の決定要因に関する実証分析は、国や地域単位で集計されたデータを用いる場合と、個人レベルのデータを用いたものに二分することができる。前者の例としては、Bjørnskov (2006) や Leigh (2006a) が、後者の例としては Alesina and La Ferrara (2002) や Gustavsson and Jordahl (2008) がある。これらの研究において、国・地域レベルの平均的な一般的信頼度、個人レベルの一般的信頼度は、ともに所得や所得格差によって決定づけられることが明らかになっている。

そのような研究の流れの中で、ジニ係数などの客観的な格差指標ではなく、より主観的な格差指標、あるいは相対所得が一般的信頼度に与える影響にも注目が集まっている。一般的信頼度という概念そのものが主観的なものであり、個人の認識や選好に大きく左右されると考えられることから、こうした研究の流れは自然なものといえる。わが国においては、小塩・浦川 (2012) が代表的な研究であり、社会経済的属性を共有する集団の所得と自らの所得の比を相対所得として定義し、相対所得と一般的信頼度の関係を分析している。その結果、男性の場合については、相対所得と一般的信頼度の間に強い関係があることを確認している。

相対所得と一般的信頼度の関係に関する研究の大半は、一時点の所得や相対所得と一般的信頼度の関係を分析しているものである。しかしながら、過去に貧しく、現在は平均的な生活を送ってい

(2) Bowles (2012).

る場合と、過去に豊かであったが、現在は平均的な生活を送っている場合では、現在の相対所得が一般的信頼度に与える影響が異なっても不思議ではない。両者を区別するためには、過去の相対所得が一般的信頼度に与える影響、さらには過去から現在までの相対所得の変化が一般的信頼度にどのような影響を与えるのか、明らかにする必要がある。

そこで、本稿では、所得や相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響について、実証分析を行う。本稿の構成は以下のものである。まず、第2節においては、先行研究の流れを整理することにより、本稿における研究課題を明確にする。第3節以降においては、分析手法とデータについて、分析結果について、本稿のまとめを順に述べる。

2. 研究の背景

上述したように、一般的信頼度の決定要因に関する研究は、国や地域レベルで集計されたデータによるものと、個人レベルのデータを用いたものに二分される。前者の代表例としては、Bjørnskov (2006) や Leigh (2006a) などがあるが、本稿では個人レベルの一般的信頼度について分析を行うため、後者に属する研究の流れについて概括する。

個人レベルの一般的信頼度の決定要因に関する研究の代表例は Alesina and La Ferrara (2002) である。Alesina and La Ferrara (2002) においては、一般的信頼度がどのような原因で決定されているのかについて、General Social Survey (GSS) を用いて分析が行われている。その結果、所得、ジニ係数で定義された所得格差、地域社会がどの程度人種隔離を行っているかなどによって一般的信頼度が左右されることが明らかになっている。人種隔離に関する分析に比重が置かれているのは、アメリカという国の事情を反映したものといえる。

その後も数多くの研究が個人レベルの一般的信頼度の決定要因について分析を行っている。たとえば、Leigh (2006b) では、オーストラリアのデータを用いて、所得格差と一般的信頼度の関係を分析している。しかしながら、ジニ係数は統計的に有意になっておらず、本文中でも述べられているように、アメリカの場合とは異なる結果となっている。Leigh (2006b) の結果は、所得や所得格差と一般的信頼度の関係は国によって異なることを示唆している点で重要である。

これらの研究に共通する問題点として、一時点の一般的信頼度を、同時点における所得や社会経済的属性に回帰していることがあげられる。信頼度が生涯を通じて不変なものであるならば、そのような分析にも一定の理があると考えられる。しかしながら、一般的信頼度が所得水準や相対所得の変化とともに動的に変化していけば、そのような分析は不完全なものである。

そうした観点から、近年では、パネルデータを用いた一般的信頼度の研究も進みつつある。個人レベルのパネルデータを用いて一般的信頼度の要因分析をした研究としては、Gustavsson and Jordahl (2008) がある。Gustavsson and Jordahl (2008) の研究はスウェーデンのパネルデータを用いて、

一般的信頼度の決定要因を分析している。その結果、やはり居住地域内の所得格差や個人の所得が個人レベルの一般的信頼度に影響を与えることが確認されており、所得や所得格差と一般的信頼度の関係は動学的なものであることが示唆される。

しかしながら、Gustavsson and Jordahl (2008) の分析結果にもまだ、若干の留保が必要である。この点は Barone and Mocetti (2012) の文中でも指摘されており、Gustavsson and Jordahl (2008) の用いたデータは比較的短期間のパネルデータであるため、一般的信頼度、所得格差ともに経時的な変化が少ない。その Barone and Mocetti (2012) は World Value Survey (WVS) を用いた集計データによる研究ではあるが、1980年代から2000年代までの長期パネルデータを用いて、所得格差と一般的信頼度の関係について分析している。その結果、所得格差と一般的信頼度の関係は主に途上国において顕著であることを確認している。

これらの研究はすべて、国、地域といったコミュニティにおける所得格差と一般的信頼度の関係を分析したものである。しかしながら、一般的信頼度が主観的な概念であり、個人の認識を表したものである以上、より主観的な、あるいは個人的な所得格差の方が一般的信頼度に対して影響を与える可能性が高い。このことは、Easterlin Paradox (Easterlin (2001) など) と呼ばれる現象や、その背景を実証的に分析している複数の論文 (Clark et al. (2008) など) から示唆されるところである。

そのため、所得格差ではなく、相対所得と一般的信頼度の関係を分析した論文も存在し、小塩・浦川 (2012) では、インターネット調査に基づいて、相対所得と一般的信頼度の関係を詳細に分析している。年齢・性別・最終学歴という客観的な準拠集団との相対所得と、最後に通った学校の同級生の平均年収の推計値を準拠集団の相対所得と考えた場合の2通りの分析を行っている。その結果、男性の場合は相対所得と一般的信頼度の間に統計的に有意な関係があるものの、女性の場合は統計的に有意な関係は見られない、という結論を得ている。この結果は、男性の方が競争的であることを示唆する近年の研究と整合的といえるものである。また、本人ベースの相対所得よりも世帯ベースの方が一般的信頼度に影響を与える、という結果も得ている。

これらの研究により、所得格差と一般的信頼度については、かなりの部分が明らかになりつつある。しかしながら、それらの関係を一時点におけるデータで説明している研究が大半であり、時系列による変化、という概念は取り入れられていない。中でも、相対所得と一般的信頼度の関係については、時系列的な観点は未だ取り入れられていない。

以前は相対所得が高かったが現在は平均的な相対所得である場合と、以前は相対所得が低かったが現在は平均的な相対所得である場合、そして、現在まで一貫して平均的な相対所得である場合などでは、相対所得が一般的信頼度に与える影響が異なっても不思議ではない。そのため、相対所得が低いことが一般的信頼度を低くさせるということが明らかになっても、相対所得が長期間低いことがそうさせているのか、それとも、相対所得が低下した、相対所得にショックが発生したこ

とがそうさせているのかが識別できない。

所得と一般的信頼度の関係を分析する際、所得をより動的に把握することで、今後のわが国において所得分布や所得水準が変化した場合、一般的信頼度がどのように変化していくかをより正確に予測することが可能になる。そこで、本稿では、一時点の相対所得ではなく、その変化が一般的信頼度にどう影響するのかを実証的に明らかにする。また、小塩・浦川（2012）では相対所得と一般的信頼度の関係には男女差があることが確認されているため、上記の点が男女によってどう異なるかも確認する。また、現役世代と引退世代で「相対所得」の意味合いが異なる可能性もあるため、本稿では通常「現役世代」とされる64歳以下のサンプルのみを分析に用いる。

3. 分析方法およびデータ

本稿では、Japan General Social Survey (JGSS) を用いて分析を行う。JGSS は、2000 年以降ほぼ毎年調査を行っているが、調査対象者は毎年変化している。したがって、JGSS はパネルデータではない。しかしながら、JGSS では15歳時の相対所得、昨年度からの所得水準の変化、現在の相対所得といった項目も調査対象者全員に毎年尋ねている。以下ではまず、分析に用いる変数とその定義について述べる。

本稿における被説明変数は一般的信頼度であるが、JGSS においても一般的信頼度を尋ねる項目が存在している。具体的には、「一般的に、人は信用できると思いますか。」という質問に対して、「はい」「いいえ」「場合による」の3つの選択肢から、もっとも当てはまるものを選ぶ形式になっている。これはアメリカの社会調査である General Social Survey (GSS) などと同様のものであり、一般的な質問文である。以下では便宜上、「はい」を「信頼できる」、「いいえ」を「信頼できない」と表記する。

表1はJGSSのうち、本稿での分析に用いるサンプルについて、信頼度の分布を表にまとめたも

表1 信頼度の分布

	男性	女性	合計	GSS	小塩・浦川 (2012)
信頼できる	1,278 (25.6%)	1,076 (20.3%)	2,354 (22.9%)	42%	0 - 10 の 10 段階
信頼できない	562 (11.2%)	513 (9.7%)	1,075 (10.4%)		男性 6.50
場合による	3,159 (63.2%)	3,714 (70.0%)	6,873 (66.7%)	58%	女性 6.52 合計 6.50

のである。小塩・浦川（2012）の場合と比べると、以下のようなことが分かる。まず、本稿のデータでは信頼度の分布に多少男女差があるが、小塩・浦川（2012）のデータでは、ほぼ男女差がない。この点は JGSS と小塩・浦川（2012）のデータの相違点である。一方、「信頼できる」を 10、「信頼できない」を 0 として信頼度の平均値を算出すると、男性が約 6.9、女性が約 6.8 で、小塩・浦川におけるものとほぼ同じであることが分かる。⁽³⁾

また、表 1 から明らかなように、この質問については、「場合による」を選択しているものももっとも多く、男女によってその割合に違いがあるものの、男女合計では「場合による」が 6 割以上を占めている。また、JGSS と GSS は互いに調査票設計の大部分を共有しているが、その GSS を用いた Alesina and La Ferrara（2002）中の記述統計よりも、「場合による」の割合がかなり大きい。⁽⁴⁾そのため、「場合による」の扱いには特に慎重を要する。本稿では、「場合による」の扱いによって分析結果が変わらないかどうかを確認するため、3 通りの分析を行っている。

まず、「場合による」についてはサンプルから除外して、「信頼できない」を 0、「信頼できる」を 1 として、プロビット・モデルによる分析を行っている。「信頼できる」と「信頼できない」に明確な序列を設けて分析できる点は利点であるが、「場合による」を排除することによりサンプルサイズが大きく減少する点が難点である。

次に、「場合による」を基準として、「信頼できる」「信頼できない」を選択する確率がどのように変化するのかについて、多項ロジット・モデルによる分析を行う。「場合による」について恣意的な仮定を置かずに分析できる点が利点であるが、「信頼できる」と「信頼できない」の関係を序列的なものとして扱わない点が難点となる。

また、「信頼できる」に 1、残りの「信頼できない」「場合による」に 0 を割り当てた分析も行っている。Alesina and La Ferrara（2002）ではこの方法で分析が行われている。ただし、「信頼できない」と「場合による」を同じカテゴリーにすることの妥当性にはやや疑問も残る。サンプルサイズが減少しない点は利点となる。

最後に、「信頼できる」に 3、「信頼できない」に 1、「場合による」に 2 を割り当てて、順序プロビット・モデルによる分析を行っている。「場合による」という表現が「信頼できる」と「信頼できない」の中間に位置するのかが判断の難しいところであるが、考え得る分析方法をすべて試すことで分析結果がより頑健になると考え、このような分析も行う。

次に、所得関連の変数に関する議論を行う。JGSS では、調査年の年間家計所得について尋ねて

-
- (3) ただし、「場合による」を 5 として平均値を計算すると、平均値は男性が約 5.7、女性が約 5.5 と、小塩・浦川（2012）の数値を大きく下回る。このことから「場合による」を許容する形の調査設計にするかどうか重要な論点であることが分かる。
- (4) 同論文中の記述統計によると、GSS においては、「信頼できる」と回答した者だけで 40 % を越える。これは JGSS において「信頼できる」または「信頼できない」と回答した者の割合よりも高い。なぜこのような日米間の差が生じるのかも、今後研究されるべき課題であろう。

いる。ただし、年間家計所得は実数値を記入する形式とはなっておらず、何段階かの所得階級の形で尋ねている。具体的には、所得階級は70万～100万円、……、2,300万円以上の18段階である。ここでは、分析しやすくするために、各々の階級の中央値を割り当てている。たとえば、所得階級が70万～100万円である場合には、所得には85万円が割り当てられる。

次に、JGSSでは毎年、主観的な所得水準についても尋ねている。「世間一般と比べて、あなたの世帯収入はどれくらいですか。」という質問に対して、「かなり少ない」「少ない」「ほぼ平均」「多い」「かなり多い」の5つから、当てはまるものを選ぶという形式になっている。この変数を用いて、現在の相対的な所得水準を定義する⁽⁵⁾。

また、15歳の時点での家計の生活水準についても、上記と同様の質問を行っている。「あなたが15歳の頃のあなたの世帯収入は、当時の平均的な世帯と比べて、どうでしたか。」という質問に対して、「かなり少ない」「少ない」「ほぼ平均」「多い」「かなり多い」の5つから、当てはまるものを選ぶという形式になっている。この変数を用いて、15歳時点の相対所得を定義する。

また、これらの2つの変数は同一の質問文・選択肢になっていることから、それらの差分を取ることが容易である。上記の2つの変数を用いて、以下のような変数を定義する。

[1] 15歳時点から現在までの相対所得の上下（2段階）

15歳時点から現在にかけて相対所得が上昇したかどうかを把握することができる。たとえば、15歳時に「少ない」だったのが現在は「平均」になっている場合には、相対所得が上昇したことになる。一方、15歳時に「平均」だったのが現在は「かなり多い」になっている場合には、相対所得が上昇したことになる。そのように定義した変数を用いて、15歳時点から現在にかけての相対所得の上下が信頼度にどのような影響を与えるのかを確認する。ベースラインは相対所得の水準が変化していない場合となる。

[2] 未成年時と現在までの相対所得の変化（9段階）

15歳時点、現在ともに相対所得は5段階である。そのため、両者の組み合わせは合計25通りある。そこで、(1) 25個のダミー変数を作成し、それらをそのまま分析に用いる。(2) 現在の相対所得が5段階、過去の相対所得が5段階なので、それらに対して高い順に1～5の数値を割り当て、両者を差し引きする。たとえば、現在の相対所得が普通である場合は、3が割り当てられる。そして、過去の所得水準が非常に貧しいである場合、1が割り当てられる。それらを差し引きすることで、所得水準が2段階上がっていることになる。変数の定義上、取り得る値は-4～4の9段階となる。

(5) 家計所得と相対所得の相関係数は男女ともおよそ0.5である。

[3] 未成年時と現在までの相対所得の変化（8種類のダミー変数）

15歳時点と現在の相対所得はともに5段階であり、上述したように、その変化には9通りの場合が考えられる。[2]では、-4~4という9段階の数値をそのまま分析に用いるが、[2]の方法では、所得水準が2段階上昇したときの信頼度への影響は、1段階上昇したときの2倍であると暗黙に仮定していることになる。

しかし、このような仮定が必ずしも成立しているとは限らない。そのため、所得水準が4段階低下した場合、3段階低下した場合、…、3段階上昇した場合、4段階上昇した場合の9通りのダミー変数を作成し、それらを用いた分析も行う。[1]の分析よりも仮定が少なくなることから、より一般化した分析といえる。所得水準が変化していない場合（0段階変化した場合）をベースラインとするため、実際に用いるダミー変数は8個となる。

[4] 未成年時と現在までの相対所得の変化（24種類のダミー変数）

[3]の場合においてもなお、大きな仮定がある。[3]においては、所得水準が「かなり少ない」から「少ない」に変化した場合と、「少ない」から「平均」、「平均」から「多い」、「多い」から「かなり多い」に変化した場合をどちらも1段階の上昇という形で同一視していることになる。しかしながら、[3]で述べたことと同様に、この仮定もあくまで仮定であり、現実にはそれが妥当しているとは限らない。そのため、同じ1段階の上昇でも、「かなり少ない」から「少ない」に変化した場合と、「少ない」から「平均」に変化した場合では信頼度への影響が異なる可能性を考慮した分析も行う必要がある。

15歳時点から現在までの所得水準の変化には、「かなり少ない」から「少ない」、「かなり少ない」から「平均」、…、「かなり多い」から「多い」、「かなり多い」から「かなり多い」まで延べ25通りの場合が考えられる。これら25通りの場合すべてについてダミー変数を作成して分析する。ただし、「平均」から「平均」の場合をベースラインとするため、実際に用いるダミー変数は24個である。

相対所得の遷移を男女別に表にまとめたものが表2である。横軸が15歳時の相対所得、縦軸が現在の相対所得となっている。そのため、たとえば左から3列目、上から2行目には、15歳時は「ほぼ平均」、現在は「やや多い」を選んだ人数が示されている。表からも明らかなように、男女とも「ほぼ平均」を選んでいる人数がもっとも多く、「ほぼ平均」から「ほぼ平均」だけで4分の1程度を占めていることが分かる。また、所得水準が大きく上昇・低下している場合はそれほど多くなく、所得水準が変化するとしても、1~2段階にとどまることがほとんどである。そのことから、所得水準が大きく変化する例は非常に希であり、かなり特異な事例であることがうかがえる。

15歳時と現在を比べた場合、15歳時の方が「多い」「かなり多い」の割合が高い。このことにはいくつかの要因が考えられるが、JGSSは2000年代に入ってから本格的に調査が開始されている。

表 2-1 15 歳時から現在にかけての相対所得の遷移（男性）

		15 歳時の相対所得					
男性 (N=4,999)		かなり少ない	少ない	ほぼ平均	多い	かなり多い	
現在の 相対所得	かなり少ない	117 (2.3 %)	195 (3.9 %)	130 (2.6 %)	46 (0.9 %)	7 (0.1 %)	495 (9.9 %)
	少ない	162 (3.2 %)	600 (12.0 %)	532 (10.6 %)	149 (3.0 %)	14 (0.3 %)	1,457 (29.1 %)
	ほぼ平均	154 (3.1 %)	637 (12.7 %)	1,116 (22.3 %)	282 (5.6 %)	19 (0.4 %)	2,208 (44.2 %)
	多い	48 (1.0 %)	209 (4.2 %)	284 (5.7 %)	169 (3.4 %)	19 (0.4 %)	729 (14.6 %)
	かなり多い	9 (0.2 %)	24 (0.5 %)	39 (0.8 %)	27 (0.5 %)	11 (0.2 %)	110 (2.2 %)
		490 (9.8 %)	1,665 (33.3 %)	2,101 (42.0 %)	673 (13.5 %)	70 (1.4 %)	4,999

表 2-2 15 歳時から現在にかけての相対所得の遷移（女性）

		15 歳時の相対所得					
女性 (N=5,290)		かなり少ない	少ない	ほぼ平均	多い	かなり多い	
現在の 相対所得	かなり少ない	97 (1.8 %)	152 (2.9 %)	152 (2.9 %)	28 (0.5 %)	2 (0.0 %)	431 (8.1 %)
	少ない	128 (2.4 %)	565 (10.7 %)	565 (10.7 %)	120 (2.3 %)	7 (0.1 %)	1,385 (26.2 %)
	ほぼ平均	162 (3.1 %)	643 (12.2 %)	1,324 (25.0 %)	319 (6.0 %)	13 (0.2 %)	2,461 (46.5 %)
	多い	63 (1.2 %)	237 (4.5 %)	367 (6.9 %)	228 (4.3 %)	8 (0.2 %)	903 (17.1 %)
	かなり多い	11 (0.2 %)	24 (0.5 %)	42 (0.8 %)	34 (0.6 %)	12 (0.2 %)	123 (2.3 %)
		461 (8.7 %)	1,621 (30.6 %)	2,450 (46.3 %)	729 (13.8 %)	42 (0.8 %)	5,303

2000 年代に入り、日本の所得分布は左寄りになっている傾向がある。その点を考えると、相対所得の分布がやや左寄りになっていることは、むしろ本稿で用いる相対所得の妥当性を示しているといえる。

加えて、相対所得の分布に男女でやや相違が見られる。女性の方が「ほぼ平均」と答えている割合が高く、その他のカテゴリーを答えている割合が低い。このことは相対所得に関する男女の考え方がわずかではあるが異なっていることを示唆している可能性がある。そのため、男女別に分析を行うことが妥当である。

表 3 変数の定義および記述統計

変数名	変数の定義	男性				女性			
		平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大
〈相対所得の変化〉									
所得上昇ダミー	15歳時と比べて、相対所得が上昇している場合=1	0.279	0.448	0	1	0.258	0.437	0	1
所得低下ダミー	15歳時と比べて、相対所得が低下している場合=1	0.319	0.466	0	1	0.323	0.468	0	1
所得の変化	15歳時と比較したときの相対所得の変化（-4~4の9段階）	-0.067	1.128	-4	4	-0.119	1.094	-4	4
1段階上昇ダミー	15歳時と比べて、相対所得が1段階上昇している場合=1	0.206	0.404	0	1	0.197	0.398	0	1
2段階上昇ダミー	15歳時と比べて、相対所得が2段階上昇している場合=1	0.060	0.237	0	1	0.054	0.226	0	1
3段階上昇ダミー	15歳時と比べて、相対所得が3段階上昇している場合=1	0.012	0.109	0	1	0.007	0.081	0	1
4段階上昇ダミー	15歳時と比べて、相対所得が4段階上昇している場合=1	0.001	0.037	0	1	0.000	0.019	0	1
1段階低下ダミー	15歳時と比べて、相対所得が1段階低下している場合=1	0.222	0.416	0	1	0.221	0.415	0	1
2段階低下ダミー	15歳時と比べて、相対所得が2段階低下している場合=1	0.080	0.272	0	1	0.083	0.276	0	1
3段階低下ダミー	15歳時と比べて、相対所得が3段階低下している場合=1	0.014	0.119	0	1	0.016	0.127	0	1
4段階低下ダミー	15歳時と比べて、相対所得が4段階低下している場合=1	0.002	0.042	0	1	0.002	0.046	0	1
〈その他の変数〉									
年齢		46.434	11.707	20	64	45.774	11.563	20	64
家計の年間所得	家計の年間所得（単位：万円）	696.971	403.133	0	4,000	676.806	439.416	0	10,000
短大・高専卒ダミー	最終学歴が短大・あるいは高専卒の場合に1	0.074	0.475	0	1	0.140	0.347	0	1
大卒ダミー	最終学歴が大卒以上である場合に1	0.343	0.261	0	1	0.230	0.421	0	1
有配偶ダミー	有配偶者である場合に1	0.785	0.411	0	1	0.802	0.398	0	1
トラウマ体験の頻度	過去5年間のトラウマ体験（離婚、失業、身近な人の死など）の頻度（0…なし，1~3…1~3回，4…4回以上）	1.079	1.160	0	4	1.293	1.218	0	4
サンプルサイズ		4,999				5,303			

その他の説明変数については、先行研究に含まれているものを用いている。年齢、性別ダミー、家計の年間所得、学歴ダミー、有配偶ダミー、トラウマ体験の頻度である。それらの変数の詳細な定義や記述統計は表3に載せられている。表3から、家計所得の平均値がやや高いことが分かる。JGSSでは家計所得について回答していない者も少なからずいることから、家計所得が高い者ほど回答率が高く、平均が押し上げられていると考えられる。そのため、家計所得を説明変数に含む場合と含まない場合を比較して、推定結果にバイアスが生じていないか確認する必要がある。

4. 分析結果

以下では、本稿における分析結果について述べる⁽⁶⁾。本稿では、15歳時から現在までの相対所得の変化について、4通りの変数を使って分析を行っている。①上昇したか低下したかの2つのダミー変数の組み合わせ、②相対所得が何段階上昇したかを-4~4の9段階で数値化したもの、③上昇・低下の仕方8パターンをそれぞれ別々のダミー変数としたもの、④相対所得の遷移24パターンすべてを別々のダミー変数にしたもの、の4通りである。これらの4通りは、最初に述べたものほど仮定が多く、後に述べたものほど仮定が少ない、という関係にある。そのため、以下では上記で列挙した順に分析結果を確認する⁽⁷⁾。

4.1 ①2つのダミー変数を用いた場合

まず、相対所得が上昇したか低下したかの2つのダミー変数を用いた場合の分析結果について確認する。以下のすべての分析結果について、男性の分析結果、女性の分析結果の順に述べる。

まず、表4から明らかなように、男性については、相対所得の上昇が一般的信頼度を高めるといふ、かなり強い関係が確認できる。興味深いのは、「相対所得が（15歳時点と比べて）上昇」というダミー変数と「相対所得が（15歳時点と比べて）低下」というダミー変数の推定結果は、符号は対称になっているものの、係数の絶対値の大きさで比較すると、いずれの場合でも「相対所得が（15歳時点と比べて）上昇」の影響が上回っている点である。それらの有意水準にもいくらかの差があるこ

(6) 本稿に載せているもの以外にも、男女双方を含むデータによる分析も行っている。その場合の分析結果は、男性の場合と女性の場合のほぼ中間であり、独自の結果はほぼ得られなかった。本稿では男女比較に焦点を当てるため、男女双方を含むデータによる分析結果は掲載していない。それ以外にも、全年齢層（95歳まで）を含むサンプルでの分析を行ったが、やはり本稿の結果とほぼ同様の結果が得られた。上記のことより、本稿の結果にはかなりの頑健性があると考えられる。

(7) 以後の分析についてはすべて、調査年の所得（相対所得ではない）を説明変数から除外した分析も行っている。理由としては、上述したように、推定結果にバイアスがないか確認するためである。予想されることではあるが、相対所得の推移が信頼度に与える影響の絶対値はやや大きくなる。しかしながら、有意な変数とそうでない変数の組み合わせや符号にはほとんど影響がない。そのため、ここでは調査年の所得を説明変数に含めている場合についてのみ議論する。

表 4 相対所得の変化が一般的信頼度を与える影響（上昇・低下のダミー変数）

	男性			女性		
	プロビット	多項ロジット 信頼できる 信頼できない	プロビット 信頼できない	プロビット	多項ロジット 信頼できる 信頼できない	順序プロビット
相対所得が上昇	0.1384* [0.0756]	0.2147*** [0.071]	-0.0403 [0.1182]	0.1295*** [0.0424]	0.1073*** [0.0383]	0.0184 [0.0805]
相対所得が低下	-0.1279* [0.0697]	-0.1879** [0.0814]	0.0082 [0.0851]	-0.111** [0.048]	-0.0756* [0.0401]	-0.1475* [0.0813]
家計所得 (単位：万円)	0.0005*** [0.0001]	0.0004** [0.0001]	-0.0005*** [0.0001]	0.0003*** [0.0001]	0.0003*** [0.0001]	0.0001*** [0.0001]
年齢	0.0095*** [0.0037]	0.0072** [0.0032]	-0.0078 [0.0052]	0.005** [0.002]	0.0049** [0.0022]	0.0018 [0.0038]
大卒ダミー (基準：高卒以下)	0.4394*** [0.0316]	0.3655*** [0.0453]	-0.3434*** [0.0814]	0.2483*** [0.0232]	0.2417*** [0.0177]	0.8121*** [0.0442]
短大卒ダミー (基準：高卒以下)	0.274*** [0.0994]	0.0508 [0.1052]	-0.4142*** [0.1194]	0.0668 [0.0628]	0.1209** [0.0509]	0.5595*** [0.082]
有配偶ダミー	0.0824 [0.0917]	-0.0724 [0.0923]	-0.2348* [0.1408]	-0.02 [0.0522]	0.0382 [0.0483]	0.2627*** [0.0502]
トラウマの順度	-0.0472 [0.037]	-0.0827** [0.0403]	-0.0101 [0.05]	-0.048** [0.0237]	-0.0308 [0.0207]	-0.1127*** [0.0289]
定数項	-0.4938*** [0.1491]	-1.5108*** [0.1926]	-0.7551*** [0.2506]	-1.107*** [0.1003]	-0.7372*** [0.1761***]	0.0255 [0.1963]
σ^1					-1.1156***	
σ^2					1.0622***	
サンプルサイズ	1,822	4,999	4,999	4,999	4,999	4,999

注：***, ** はそれぞれ 1 %, 5 %, 10 %水準で統計的に有意。

とから、男性の一般的信頼度は、相対所得の低下ではなく、相対所得の上昇によって大きく左右されることが分かる。

次に、女性については、「相対所得が（15歳時点と比べて）上昇」というダミー変数はすべての場合において有意ではない。その一方、「相対所得が（15歳時点と比べて）低下」というダミー変数は2つの場合で有意である。そのため、女性の一般的信頼度は相対所得の上昇よりも低下に反応するといえるが、その度合いは男性の場合よりも小さいことが分かる。

相対所得以外の変数に関する推定結果も簡単に確認しておく。まず、家計所得が高いほど一般的信頼度が高くなっている。係数や有意水準から判断すると、家計所得が一般的信頼度に与える影響も、男性の方が大きいことが分かる。その他、年齢が高いほど、学歴が高いほど、トラウマの頻度が少ないほど一般的信頼度が高い。学歴については、学歴が高いほど生活にゆとりが生まれることから他者を信頼しやすくなると考えられる。また、トラウマの頻度については、トラウマ体験というのは通常、他者との関わりの中で発生するものであり、そうした体験が他者への信頼度を低下させることはむしろ自然であるといえる。

4.2 ② 9段階で数値化したものを用いた場合

次に、相対所得の変化を-4~4の9段階で数値化した場合の分析結果について確認する。

まず、表5から明らかなように、男性については、相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響がかなり大きい。多項ロジット・モデルにおける「信頼できない」確率以外のすべてのケースにおいて有意な影響があり、有意水準も高い。これらの結果は4.1における結果とも整合的である。

次に、女性については、すべてのケースにおいて係数が有意ではない。4.1でも相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響は男性よりも弱い、という結果になっていたが、ここでの結果はそのことをさらに裏付けるものである。

相対所得以外の変数の係数も表に載せているが、4.1の場合とほぼ同様であるため、ここでは詳細に述べない。

4.3 ③ 8パターンのダミー変数を用いた場合

次に、相対所得の変化を8種類のダミー変数で定義した場合の分析結果について確認する。

まず、男性については、相対所得の低下よりも、相対所得の上昇の方が大きな影響を持つことが分かる。表6の左側の上半分と下半分を比較することで、この点が確認できる。また、符号についてはおおむね、相対所得が上昇するほど一般的信頼度が高まる、というものになっている。これらの結果は4.1および4.2と整合的なものである。また、「1段階上昇」「2段階上昇」の場合は特に有意水準が高いものが多いため、相対所得の大幅な上昇よりも、相対所得の小幅から中程度の上昇の方が、一般的信頼度に好影響を与えることが分かる。

表 5 相対所得の変化が一般的信頼度を与える影響（4～4の9段階）

	男性				女性				
	プロビット	多項ロジット	プロビット	順序プロビット	プロビット	多項ロジット	プロビット	順序プロビット	
所得の変化	0.0820**	0.1254***	-0.0200	0.0753***	0.0577***	0.0408	0.0379	0.0224	0.0178
（4～4の9段階）	[0.0359]	[0.0380]	[0.0369]	[0.0237]	[0.0196]	[0.0334]	[0.0408]	[0.0230]	[0.0173]
家計所得	0.0005***	0.0004**	-0.0005***	0.0003***	0.0003***	0.0002	0.0002**	0.0001***	0.0001**
（単位：万円）	[0.0001]	[0.0002]	[0.0001]	[0.0001]	[0.0001]	[0.0001]	[0.0001]	[0.0001]	[0.0001]
年齢	0.0096***	0.0072**	-0.0078	0.0050**	0.0049**	0.0017	0.0019	0.0012	0.0010
大卒ダミー	[0.0037]	[0.0032]	[0.0053]	[0.0020]	[0.0022]	[0.0038]	[0.0026]	[0.0017]	[0.0020]
（基準：高卒以下）	0.4400***	0.3659***	-0.3447***	0.2487***	0.2424***	0.8097***	0.5934***	0.3892***	0.4060***
短大卒ダミー	[0.0312]	[0.0477]	[0.0811]	[0.0245]	[0.0180]	[0.0421]	[0.0937]	[0.0508]	[0.0304]
（基準：高卒以下）	0.2746***	0.0529	-0.4154***	0.0678	0.1220**	0.5537***	0.3935***	0.2569***	0.2705***
有配偶ダミー	[0.0985]	[0.1072]	[0.1202]	[0.0638]	[0.0514]	[0.0809]	[0.0971]	[0.0566]	[0.0432]
トハウマの頻度	0.0800	-0.0722	-0.2339*	-0.0210	0.0374	0.2682***	-0.0158	0.0220	0.0948***
	[0.0930]	[0.0917]	[0.1399]	[0.0522]	[0.0488]	[0.0486]	[0.0911]	[0.0469]	[0.0244]
定数項	-0.4941***	-0.0826**	-0.0106	-0.0479**	-0.0305	-0.1137***	-0.1580***	0.0499	-0.0919***
	[0.0366]	[0.0398]	[0.0501]	[0.0234]	[0.0204]	[0.0282]	[0.0227]	[0.0470]	[0.0139]
	-0.4941***	-1.5036***	-0.7664***	-1.1028***		-0.0203	-1.4684***	-1.4210***	-1.0089***
	[0.1493]	[0.1858]	[0.2452]	[0.0974]		[0.1867]	[0.1923]	[0.2614]	[0.1145]
σ^1				-0.7440***					-1.0980***
σ^2				1.16872***					1.0792***
サンプルサイズ	1,822	4,999	4,999	4,999	4,999	1,583	5,303	5,303	5,303

注：***, **, * はそれぞれ1%, 5%, 10%水準で統計的に有意。

表 6 相対所得の変化が一般的信頼度を与える影響 (8種類のダミー変数)

	男性				女性				
	プロビット	多項ロジット	プロビット	順序プロビット	プロビット	多項ロジット	プロビット	順序プロビット	
1 段階上昇	0.1891* [0.0999]	0.1820** [0.0903]	-0.1478 [0.1420]	0.1175** [0.0556]	0.1152** [0.0512]	0.0198 [0.1043]	0.0539 [0.0976]	0.0283 [0.0547]	0.0010 [0.0453]
2 段階上昇	0.0224 [0.1035]	0.3814*** [0.1017]	0.2971** [0.1491]	0.2026*** [0.0603]	0.1100* [0.0581]	0.0220 [0.1605]	0.1194 [0.1514]	0.0718 [0.0820]	0.0456 [0.0711]
3 段階上昇	-0.0965 [0.2895]	0.0091 [0.2399]	0.2097 [0.4347]	-0.0134 [0.1548]	-0.0424 [0.1608]	-0.0565 [0.2030]	0.3052 [0.4558]	0.1597 [0.2456]	0.0908 [0.1419]
4 段階上昇		-0.3235 [0.6903]	-12.0660*** [0.6371]	-0.1411 [0.4080]	0.0592 [0.2393]		-14.4196*** [0.7816]		-0.3650*** [0.1361]
1 段階低下	-0.0970 [0.0943]	-0.2124*** [0.0746]	-0.0662 [0.1275]	-0.1189*** [0.0460]	-0.0655 [0.0462]	-0.1976** [0.0814]	-0.0773 [0.1211]	-0.0562 [0.0668]	-0.0904** [0.0404]
2 段階低下	-0.1588 [0.0984]	-0.1089 [0.1482]	0.1420 [0.1236]	-0.0780 [0.0821]	-0.0844 [0.0616]	-0.0466 [0.1180]	-0.0725 [0.1818]	-0.0378 [0.1031]	-0.0093 [0.0719]
3 段階低下	-0.3060 [0.3372]	-0.1722 [0.5123]	0.2213 [0.1370]	-0.1256 [0.2935]	-0.1360 [0.1964]	0.1095 [0.3326]	0.4400 [0.3107]	0.2473 [0.1929]	0.1571 [0.1883]
4 段階低下	-0.7312 [0.8547]	-0.8081 [1.0637]	0.5081 [0.8741]	-0.5271 [0.5963]	-0.4354 [0.4682]		-14.0426*** [0.5287]	-0.3628 [1.0465]	-0.3931* [0.2370]
σ^1					-0.7341***				-1.1148***
σ^2					1.1798***				1.0646***
サンプルサイズ	1,822	4,999	4,999	4,999	4,999	1,583	5,303	5,303	5,303

注: ***, **, * はそれぞれ 1%, 5%, 10%水準で統計的に有意。

女性については、表6の右半分で確認できる。女性の場合、顕著な影響が見られるのは、「1段階低下」「4段階上昇」の2つのダミー変数である。前者については、4-1での結果と整合的であり、女性の一般的信頼度は相対所得の低下、中でもわずかな低下に強く影響されることが分かる。相対所得の「4段階上昇」が一般的信頼度に与える影響については、以下のように説明できる。多項ロジットの場合は「信頼できる」「信頼できない」を選ぶ確率を共に低下させている。その一方、「信頼できる」を1、「場合による」「信頼できない」を0としたプロビット・モデルの場合は、「信頼できる」を選ぶ確率を低下させている。そのため、相対所得が「4段階上昇」すると、「場合による」を選ぶ確率が高くなっていることが分かる。

相対所得以外の変数の係数については、4.1および4.2の場合とほぼ同様である。そのため、表から割愛している。

4.4 ④ 24 パターンのダミー変数を用いた場合

最後に、相対所得の変化を24種類のダミー変数で定義した場合の分析結果について確認する。上述したように、15歳時から現在までの相対所得の推移には延べ25通りが考えられる。その中の1つは基準値として用いる必要があり、分析に含めることはできない。そのため、24種類のダミー変数によって相対所得の変化を把握することになる。このような形で相対所得の変化を定義することは、考え得る中でもっとも恣意性が少なく、仮定も少ない定義となる。

なお、いくつかのセルが空白になっているのは、以下の理由による。たとえば、相対所得の変化が「かなり少ない→かなり少ない」である者は全員「信頼できない」を選んでいるとする。この場合、「かなり少ない→かなり少ない」ダミーの係数は推定できない。

まずは男性について確認する。表7-1から、これまでも確認したとおり、相対所得が上昇した場合に、一般的に信頼度が大きく変化している。具体的には、「かなり少ない→かなり多い」「かなり少ない→平均」「少ない→かなり多い」「少ない→多い」「平均→かなり多い」「平均→多い」などの場合には有意な影響が見られる。一方、相対所得が「平均→少ない」「多い→かなり少ない」に変化した場合には一般的信頼度が有意に低下していることから、相対所得の低下による影響も少なからず存在することになる。

次に女性について確認する。表7-2から、これまでの場合と同様、相対所得が低下した場合、あるいは止まっている場合に一般的信頼度に強い影響がある。とりわけ、「少ない→かなり少ない」「平均→かなり少ない」「平均→少ない」などの場合に、顕著な影響がある。また、「かなり多い→少ない」の場合には、むしろ一般的信頼度が高まっていることが分かる。このため、特に女性の場合は相対所得が上昇すればするほど一般的信頼度が高まるわけではないといえる。

相対所得以外の変数の係数については、4.1および4.2の場合とほぼ同様である。そのため、表から割愛している。

表 7-1 相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響 (24 種類のダミー変数) 男性

	男性				
	プロビット	多項ロジット		プロビット	順序プロビット
		信頼できる	信頼できない		
かなり少ない→かなり多い		-0.2263 [0.6896]	-13.4681*** [0.6005]	-0.0855 [0.4079]	0.0841 [0.2437]
かなり少ない→多い	-0.2460 [0.2829]	0.1963 [0.1845]	0.5905 [0.4394]	0.0620 [0.1311]	-0.0573 [0.1779]
かなり少ない→平均	-0.2358 [0.2091]	0.2415 [0.2469]	0.6060** [0.2932]	0.0848 [0.1361]	-0.0628 [0.1110]
かなり少ない→少ない	-0.2613 [0.2257]	-0.0259 [0.2697]	0.4235** [0.1977]	-0.0558 [0.1620]	-0.1268 [0.1344]
かなり少ない→かなり少ない	-0.3758 [0.2506]	0.1093 [0.2863]	0.7389** [0.3139]	-0.0231 [0.1748]	-0.2013 [0.1729]
少ない→かなり多い		-0.3186 [0.4073]	-13.3474*** [0.5780]	-0.1420 [0.2431]	0.0150 [0.1627]
少ない→多い	0.1095 [0.1387]	0.4412** [0.1968]	0.2628 [0.2552]	0.2473** [0.1140]	0.1581* [0.0935]
少ない→平均	0.1676 [0.2170]	0.1007 [0.1420]	-0.2115 [0.2607]	0.0711 [0.0976]	0.0863 [0.1005]
少ない→少ない	-0.1846 [0.1491]	-0.0262 [0.1343]	0.2755* [0.1436]	-0.0396 [0.0863]	-0.0835 [0.0795]
少ない→かなり少ない	-0.3772* [0.2247]	-0.7118** [0.2938]	-0.0427 [0.2349]	-0.3910** [0.1596]	-0.2180** [0.1028]
平均→かなり多い		1.2305*** [0.2950]	-13.1880*** [0.6470]	0.8252*** [0.1780]	0.8363*** [0.1576]
平均→多い	0.4088** [0.1936]	0.5189*** [0.1318]	-0.1837 [0.3437]	0.3262*** [0.0842]	0.2867*** [0.0897]
平均→少ない	-0.0966 [0.0997]	-0.1129* [0.0684]	0.0371 [0.1623]	-0.0710* [0.0408]	-0.0518 [0.0459]
平均→かなり少ない	-0.2366 [0.1772]	-0.0724 [0.1246]	0.3763 [0.2982]	-0.0797 [0.0708]	-0.1363 [0.0942]
多い→かなり多い	0.0864 [0.3380]	0.2444 [0.5221]	0.5088 [0.6348]	0.1197 [0.2756]	0.0049 [0.2055]
多い→多い	0.3545 [0.2495]	0.2321 [0.2660]	-0.4463 [0.3444]	0.1635 [0.1695]	0.1775 [0.1497]
多い→平均	-0.2069 [0.1959]	-0.1343 [0.1665]	0.2011 [0.1862]	-0.0958 [0.1078]	-0.1035 [0.1025]
多い→少ない	-0.3489* [0.1905]	-0.2982 [0.2227]	0.2268 [0.2055]	-0.1912 [0.1272]	-0.1695* [0.1006]
多い→かなり少ない	-0.6440* [0.3501]	-0.6763 [0.5125]	0.2316 [0.1820]	-0.4005 [0.2728]	-0.2839** [0.1425]
かなり多い→かなり多い	-0.4932 [0.5496]	-0.1272 [0.7463]	1.0214* [0.5556]	-0.1483 [0.4418]	-0.3320 [0.3817]
かなり多い→多い	-0.5954 [0.4617]	-0.4597 [0.5666]	0.8012** [0.4046]	-0.3297 [0.3308]	-0.4080 [0.2699]
かなり多い→平均	0.0659 [0.3127]	0.5616 [0.4647]	0.4808 [0.6639]	0.2921 [0.2454]	0.1440 [0.2101]
かなり多い→少ない	-0.1061 [0.4082]	0.5380 [0.5916]	0.7358 [0.4596]	0.2426 [0.3525]	0.0339 [0.3276]
かなり多い→かなり少ない	-0.8519 [0.8614]	-0.8272 [1.0733]	0.6781 [0.9051]	-0.4864 [0.4764]	-0.4864 [0.4764]
σ^1					-0.7836***
σ^2					1.1395***
サンプルサイズ	1,822	4,999	4,999	4,999	4,999

注：***, **, * はそれぞれ 1 %, 5 %, 10 % 水準で統計的に有意。

表 7-2 相対所得の変化が一般的信頼度に与える影響 (24 種類のダミー変数) 女性

	女性				
	プロビット	多項ロジット		プロビット	順序プロビット
		信頼できる	信頼できない		
かなり少ない→かなり多い		-15.0598*** [0.7583]	-14.5965*** [0.7921]		-0.3738*** [0.0963]
かなり少ない→多い	0.0020 [0.2803]	0.1496 [0.5259]	-0.0638 [0.6989]	0.1423 [0.2116]	0.0689 [0.1755]
かなり少ない→平均	-0.1171 [0.2031]	-0.2751 [0.2459]	-0.1001 [0.2017]	-0.1027 [0.1153]	-0.0800 [0.0945]
かなり少ない→少ない	-0.5016* [0.2993]	-0.2480 [0.3418]	0.5951*** [0.1833]	-0.1609 [0.1599]	-0.2660 [0.1648]
かなり少ない→かなり少ない	-0.3089* [0.1675]	0.0312 [0.2301]	0.4506*** [0.1655]	-0.1047 [0.0948]	-0.1312 [0.0867]
少ない→かなり多い	-0.2300 [0.8640]	0.8855 [0.5846]	1.1981 [1.3195]	0.5648** [0.2808]	0.1501 [0.6188]
少ない→多い	-0.0112 [0.3625]	0.4403 [0.2700]	0.3278 [0.5005]	0.3417** [0.1633]	0.1286 [0.2028]
少ない→平均	0.0728 [0.0920]	0.0151 [0.1376]	-0.0845 [0.1374]	0.0340 [0.0792]	0.0242 [0.0484]
少ない→少ない	-0.2642** [0.1239]	-0.3412*** [0.0975]	0.0559 [0.1384]	-0.1866*** [0.0594]	-0.1335*** [0.0497]
少ない→かなり少ない	-0.6896*** [0.2196]	-0.3455 [0.2709]	0.7220*** [0.2346]	-0.2426** [0.1126]	-0.3583*** [0.1033]
平均→かなり多い		0.1456 [0.5904]	-14.0687*** [0.5219]	0.3484 [0.2510]	0.2582 [0.2988]
平均→多い	0.0375 [0.1625]	0.1321 [0.1335]	0.1761 [0.2249]	0.1009 [0.0855]	0.0221 [0.0792]
平均→少ない	-0.2925** [0.1148]	-0.1557 [0.1214]	0.2650 [0.2018]	-0.0988* [0.0578]	-0.1286*** [0.0471]
平均→かなり少ない	-0.3033** [0.1353]	-0.2381 [0.3056]	0.1840 [0.3288]	-0.0840 [0.0909]	-0.1334* [0.0806]
多い→かなり多い		-15.0760*** [0.4668]	0.5635 [1.0029]		-0.7854*** [0.2537]
多い→多い	0.1723 [0.1756]	0.2274** [0.1046]	0.0057 [0.2191]	0.2003*** [0.0656]	0.1070 [0.0811]
多い→平均	-0.1072 [0.1939]	-0.1408 [0.1667]	0.0908 [0.1505]	-0.0548 [0.0959]	-0.0777 [0.0953]
多い→少ない	0.0719 [0.0910]	-0.0789 [0.2592]	-0.2994* [0.1662]	0.0407 [0.1352]	0.0265 [0.0798]
多い→かなり少ない	-0.2622 [0.4132]	0.0461 [0.4105]	0.2898 [0.4001]	0.0162 [0.1999]	-0.0642 [0.2188]
かなり多い→かなり多い	-0.5677 [0.5556]	-0.6500 [0.4989]	0.2335 [0.9329]	-0.4916* [0.2920]	-0.3029 [0.1985]
かなり多い→多い	-0.0410 [0.2664]	0.5400 [0.3467]	0.5386 [0.5153]	0.1993 [0.1447]	0.1481 [0.1700]
かなり多い→平均	-0.5143* [0.2855]	-0.2300 [0.3528]	0.5283 [0.6741]	-0.0572 [0.1798]	-0.2226 [0.1452]
かなり多い→少ない	0.7618** [0.3724]	0.9382** [0.4112]	-0.4782 [1.0801]	0.4194* [0.2187]	0.5466*** [0.1610]
かなり多い→かなり少ない		-14.7570*** [0.5134]	-0.2521 [1.0067]	-0.6810 [0.5224]	-0.4575* [0.2378]
σ^1					-1.1711***
σ^2					1.0181***
サンプルサイズ	1,583	5,303	5,303	5,303	5,303

注：***, **, * はそれぞれ 1 %, 5 %, 10 %水準で統計的に有意。

4.5 分析結果に関する考察

これらの分析により、以下の三点が確認できた。まず、相対所得の変化は一般的信頼度に大きな影響がある。次に、その影響は男女で異なっており、どちらかといえば、男性の一般的信頼度は相対所得の上昇に、女性の一般的信頼度は相対所得の低下に影響される。最後に、4.4の結果より、概して相対所得の急激な変化よりも、漸増あるいは漸減の方が一般的信頼度に対する影響が強く、推定値の符号を見た場合に期待されるとおりの結果となっていることが多い。

まず、相対所得の変化が信頼度に影響を与える、という点であるが、この点については、国単位のパネルデータを用いた Barone and Mocetti (2012) とも整合的といえよう。なぜ相対所得の変化が信頼度に影響を与えるのかについては、相対所得が変化する過程が重要であるという仮説と、相対所得が変化した結果としてそうなっているという仮説が考えられる。家計所得をコントロールした上でも相対所得の変化度合いが信頼度を左右していることを考えると、過程が影響している部分もあると考えられる。

次に、これらの中でも興味深いのは、男女差および相対所得の大幅な変化が持つ影響であろう。まず、男女差については以下のような考察が可能である。小塩・浦川 (2012) においても、相対所得と信頼度の関係は男性の方が強かった。本稿においても、相対所得と信頼度の関係は男性の方が強かったため、本稿の結果は小塩・浦川 (2012) と整合的である。また、小塩・浦川 (2012) においては、相対所得と信頼度の関係に関する男女差については考察がなされていないが、相対所得と幸福度の関係の男女差については詳しい考察がなされている。小塩・浦川 (2012) にもあるように、わが国においては、男性の場合は自らが主な稼ぎ手となることが多いため、相対所得が価値観に直結しやすく、女性の場合はそうではないため、相対所得と価値観の結びつきがやや弱まる可能性が考えられる。

本稿においては、相対所得と信頼度の関係の強さだけでなく、相対所得の上下どちらが信頼度を左右するのかについても、明確な男女差が見られた。男性の信頼度は、もっぱら相対所得の上昇に左右される。一方、女性の信頼度はむしろ相対所得の低下に対して敏感である。男性については、小塩・浦川 (2012) の結果とも整合的である。同論文においては、平均よりも所得が低い男性の方が、相対所得が上昇したときの信頼度の変化が大きいことが明らかにされている。本稿の結果、すなわち、男性の信頼度は相対所得の上昇に対して強く反応するという結果は、それと整合的なものである。

これらの男女差については、上述したような解釈とは別に、男性の方が競争的であることを示すような先行研究、たとえば Niederle and Vesterlund (2007) などとも整合的であるといえる。同論文によると、男性の方がやや自信過剰な側面があり、そのために競争的な選択をする可能性が高いとされる。男性は相対所得の上昇を望み、女性は相対所得が低下しないこと、あるいは維持できることを望むとするならば、本稿のような結果が説明可能となる。

最後に、なぜ相対所得の急激な変化は信頼度に影響を及ぼしにくいのか、あるいは期待されるものとは逆の符号になっていることがあるのか、という点について考察を加える。まず、同一個人の相対所得が大幅に変化することは非常に希であり、そのことは本稿で使用したデータにも当てはまる。相対所得が大きく変化したサンプルが少ないことが検出力に悪影響を及ぼしているかもしれない。

また、そうした問題以外にも、以下のような仮説が考えられる。相対所得が大幅に上昇するということはかなり希であるため、できる限り偏差値の高い大学に進学し、できる限り規模の大きな企業に就職するなどという通常理想とされる進路とはかなり異なる進路を辿る必要があると考えられる。通常とは異なる、おそらくかなり険しいであろう進路を辿ることは、一般的信頼度の醸成に悪影響を及ぼすかもしれない。たとえば、社会経済的地位が急激に向上していく中で、周囲の交友関係が次々と変化したり、あるいは周囲からの評価が急激に変化したりするようなことがあれば、他者に対する信頼が損なわれても不思議ではない。それらの要素と、相対所得が高まることによるゆとりや安心感が相殺されることにより、符号が有意でなくなったり、期待されるものとは逆の符号で有意になったりする可能性がある。

5. まとめ

本稿では、所得の高低や相対的な所得水準のみならず、それらの変化が信頼度に対してどのように影響するのかについて、実証分析を行った。その結果は以下に要約される。

まず、15歳時点から現在にかけての相対所得の変化は、信頼度に大きな影響を与えていた。次に、相対所得の変化が信頼度に与える影響は、男性においてより顕著であった。この点是小塩・浦川(2012)の結果と整合的といえる。また、概して男性の一般的信頼度は相対所得の上昇に、女性の一般的信頼度は相対所得の低下に影響されやすい。この結果は小塩・浦川(2012)以外にも、男女の選好の違いを示唆する様々な先行研究と整合的である。最後に、相対所得の大幅な変化、特に相対所得の大幅な上昇は、一般的信頼度を高める効果を持っていない。この結果は、相対所得と信頼度の関係の複雑さを示すものといえる。

本稿の結果から、以下のような政策的示唆が導かれる。まず、相対所得の変化が一般的信頼度に影響を与えることから、社会全体の信頼度を高めるためには、社会全体の所得分布に常に注視する必要がある。次に、わずかな相対所得の変化の方が信頼度を大きく左右するということは、何らかの所得政策を講じることで、社会全体の信頼度低下を防げる可能性がある。通常、所得政策による相対所得の変化はそれほど大幅なものにはならないからである。

最後に、分析上の留保を述べておく。まず、本稿で用いた相対所得は主観的な変数であり、小塩・浦川(2012)のもの比べると、やや精度が粗いと考えられる。客観的な相対所得よりも主観的な相対所得が信頼度に大きく影響する可能性も十分考えられるが、それぞれの場合で分析結果がどう

異なるかを確認しておくことが望ましい。そのためには、長期的なパネルデータの調査項目に信頼度を含める必要があり、長期的な研究が必要となる。

また、小塩・浦川（2012）の場合と同様、本稿においても、男女による分析結果の違いが顕著であった。この違いがどのような要因によるものなのか、危険回避度、競争に関する選好、他者との信頼を築いていく過程など、様々な点に関する男女差を研究していく必要がある。

（東洋大学経済学部助教）

（経済学部教授）

参 考 文 献

- 小塩隆士・浦川邦夫（2012）、「主観的厚生に関する相対所得仮説の検証——幸福感・健康感・信頼感——」『経済研究』、63巻1号、pp.42–55。
- Alesina, A. and E. La Ferrara (2002), “Who Trust Others?,” *Journal of Public Economics*, Vol.85, No.2, pp.207–234.
- Arrow, K. (1970), “Political and Economic Evaluation of Social Effects and Externalities,” National Bureau of Economic Research (Eds.), *The Analysis of Public Output*, pp.1–30.
- Barone, G. and S. Mocetti (2012), “Inequality and Trust: New Evidence from Panel Data,” *mimeo*.
- Beugelsdijk, S., H. L. F. Groot and A. Schaik(2004), “Trust and Economic Growth: A Robustness Analysis,” *Oxford Economic Papers*, Vol.56, No.1, pp.118–134.
- Bjørnskov, C. (2006), “Determinants of Generalized Trust: A Cross-country Comparison,” *Public Choice*, Vol.130, pp.1–21.
- Bowles, S. (2012), *The New Economics of Inequality and Redistribution*, Cambridge University Press. (佐藤良一・芳賀健一（2013）, 『不平等と再分配の新しい経済学』大月書店。)
- Clark, A. E., E. P. Frijters and M. A. Shields (2008), “Relative Income, Happiness and Utility: An Explanation for the Easterlin Paradox and Other Puzzles,” *Journal of Economic Literature*, Vol.46, No.1, pp.95–144.
- Easterlin, R. A. (2001), “Income and Happiness: Towards a Unified Theory,” *Economic Journal*, Vol.111, No.473, pp.465–484.
- Gustavsson, M. and H. Jordahl (2008), “Inequality and Trust in Sweden: Some Inequalities are More Harmful Than Others,” *Journal of Public Economics*, Vol.92, No.1, pp.348–365.
- Kuroki, M. (2011), “Does Social Trust Increase Individual Happiness in Japan?,” *Japanese Economic Review*, Vol.62, No.4, pp.444–459.
- Leigh, A. (2006a), “Does Equality Lead to Fraternity?,” *Economic Letters*, Vol.93, No.1, pp.121–125.
- Leigh, A. (2006b), “Trust, Inequality and Ethnic Heterogeneity,” *The Economic Record*, Vol.82, No.258, pp.268–280.
- Niederle, M. and L. Vesterlund (2007), “Do Women Shy Away From Competition? Do Men Compete Too Much?,” *Quarterly Journal of Economics*, Vol.122, No.3, pp.1067–1101.